

【研究主題】子どもの命を救う！学校体制づくり

【副題】アクションカードを活用した緊急時対応訓練の実践

【学校・団体名】栃木県宇都宮市立西が岡小学校

【役職名・氏名】養護教諭 木下 史子

1 主題設定の理由

令和5年度の小中学校における死亡事例は23件であった※1。このうち頭部外傷や窒息等の原因があるものが約7割、原因不明の突然死が約3割であった。

学校安全は当然ながら事故発生の未然防止が大前提ではあるが、防ぎようのない突然死による死亡事例もあることを考えると、万が一に備えて子どもの命を救う体制を整えておくことも重要である。子どもの怪我や病気には保健室で養護教諭が対応することが基本ではあるが、命に関わるような緊急性・重症度が高い症状の場合は、養護教諭ひとりでは十分な対応が取れないため、組織的な対応の必要性を常に感じている。そこで、アクションカードを作成することにより、緊急対応への知識や経験がなくても複数人が連携しながら遺漏なく対応でき、緊急時の子どもの命を迅速に医療機関へつなぐことができるのではないかと考えた。

また、アクションカードを作成し周知しただけでは、各個人が自信をもって緊急対応に臨むことはできないと考える。実際、過去に心肺停止事故事例があった学校において、養護教諭が心肺蘇生をする中、職員の多くが遠巻きに見守るだけで救助に参加しなかった（できなかった）という事例も耳にしている。その理由を後から聞くと、「養護教諭が対応しているから大丈夫だと思った」「何をしたらいいかわからなかった」「恐かった」などの意見があった。そこで、実際の事故現場を想定した緊急時対応訓練を行うことで、各自の経験値が上がり、緊急時に「私が助ける！」と行動できる教員が育つのではないかと考えた。

以上のことにより、アクションカードの作成と緊急時対応訓練の両方が揃うことで、学校全体の緊急対応力が上がると考えた。

本研究は、令和4年度に上記の考えに至ったことをきっかけに開始し、継続して取り組んできたものである。本稿では、これまでの取組と現段階の考察を報告する。

2 実践の方法

- (1) アクションカードの作成
- (2) 緊急時対応訓練の計画立案、準備、実施
- (3) 緊急時対応訓練の振り返り、アクションカードのブラッシュアップ

3 実践の内容

- (1) アクションカードの作成（R4～）

本校にはもともとアクションカードがなく、私自身も20年以上の勤務経験の中でアクションカードを活用したり目にしたりしたことがなかった。近年、全国では学校に関わる事件・事故後にアクションカードの有効性が取り上げられるようになりつつあるものの、アクションカード自体を公開している学校や行政機関はほぼなく情報を得るのに苦心した。学校保健関係者に情報提供を呼びかけ、アクションカードを備えている学校からモデルを収集し、いくつかのアクションカードがそろったところで内容の分析と自校化を行った。

各校のアクションカードは様々で、初めて作成する身としては教育委員会等からモデルが示されるとよいと感じた。しかし、それぞれのカードを読み解くと、各校の実態（病児の有無、職員構成、児童・生徒の実態、学校の環境など）から最適なカードを作成していることが分かった。本校でも自校の実態に沿う内容で新しく作成することとした。

以下に本校のカード作成時に重視したポイントを示す。

- | | |
|----------------|-----------|
| ① 必要最低限の枚数 | 【簡潔性、効率性】 |
| ② 見やすく、指示は具体的に | 【視認性、具体性】 |
| ③ だれでも使える | 【平易性、即応性】 |

①については、本校の職員数から緊急対応に向かえる人数が限られていることを踏まえた。②については緊急時には気が動転しやすく、正確に情報を読み取り行動することが困難であることから、その点に留意した。③については、管理職が不在の場合も想定し、立場に関係なく誰でも使用できることを意識した。

作成したアクションカードは次のとおりである。

【初回作成のもの】(R4)一部抜粋

この後、訓練のたびに振り返りと改善を重ね、徐々に改良が加えられている。

(2) 緊急時対応訓練の計画立案、準備、実施 (R5～)

作成したアクションカードを紹介し使用法の説明をする場として職員研修の時間を確保した。

研修初期の段階では、「アクションカードを見たことがある」職員は全体の1割ほどで、実際に使用経験のある職員はいなかった。全体説明後に、事故現場を想定した緊急時対応訓練を実施した。

【設定】昼休み、2年教室で友だちと遊んでいたA子が気分不良を訴え、ぐったりした様子。A子には食物アレルギーがありエピペンが処方されている。

【訓練の様子】



研修の進行と記録のため、養護教諭は不在という設定で実施している。その結果、どの職員も養護教諭任せにすることなく「自分が動かなければならない」という意識を持って主体的に参加する姿が見られた。

研修後に「アクションカードのとおりにはやらないといけないのか」という質問が職員から出たが、「アクションカードは厳密に従わなければならない“手順書”ではない。だれが居ても居なくても、最低限の対応ができるよう備えておく“支援ツール”である。」ということを確認することができた。アクションカードの意義を考えるよい質問となった。

この後、設定や状況を変えて年に2回ずつ緊急時対応訓練を実施している。

(3) 緊急時対応訓練の振り返り、アクションカードのブラッシュアップ (R5～)

訓練後には毎回、振り返りの時間を設けている。自分が役割を担って訓練をしていると全体の状況が把握しづらいため、各自の体験に基づいて「感じたこと・考えたこと」を共有することで、1回の訓練から得られる学びや経験値を高めることができる。「訓練と分かっていても焦ってしまった」「恐さを感じた」「人が集まってくると安心できる」といった感想が多く、緊急時にはできるだけ多くの人の協力が必要であることを実感する時間となっている。

また、保護者役や救急隊役を担当した職員からの感想も学ぶ点が多く、保護者対応や救急隊への応答の仕方について、より適切な方法を考える良い機会となっている。

【職員の感想】

- ・傷病者と二人きりになったとき、どうしたらよいか戸惑い右往左往してしまった。
- ・緊急時こそ冷静に落ち着いた行動が必要であることを改めて認識した。
- ・救急処置についてまだまだ自信が持てず、消極的になってしまう。自信をもって行動するために、もう一度命を守る行動について確認したいと思った。

- ・救急隊役に質問されたことに、その場にいた誰もきちんとした時刻を伝えられなかった。記録の必要性を感じた。
- ・細かい指示ができない人がリーダーになっても、アクションカードを配るだけで緊急時に必要な動きができるのは安心だと思った。
- ・AEDの場所や取り出し方、エピペンや管理指導表の場所は、一度確認しておくことの重要性を痛感した。
- ・現場や本部の先生方が集中して対応できるように、その他の児童を落ち着かせたり様子を確認したりすることが大切だと感じた。

【意見】

- ・アクションカードに「〇〇から持って行く」という物品の所在まで明記すると迷わなくてよい。
- ・リーダーへの報告内容を明記してあると、意識して行動できる。
- ・慌ててしまい、カードの細かい指示を読まなかった。リーダーが手渡すときに、指示を一緒に読んで伝えてはどうか。
- ・アクションカードの写しが本部手持ち資料にあると、各役割分担の進捗状況を冷静に確認できると思う。
- ・黒板に状況や経過等が書いてあると分かりやすくて良い。(後から駆け付けた人に説明する手間が省ける)

これらの意見をもとに、回数を重ねるごとにアクションカードの改良を行っている。

【今までの改良点】

- ・全てA4サイズに拡大。
⇒見やすい。字が大きくなり読み間違いがなくなる。
- ・首にかけられるように紐をつける。
⇒手が自由になる。置き忘れ・紛失防止。他の職員から見て誰が何の役割をしているのか一目瞭然となる。
- ・指示文を分かりやすく直す。(何を使って何をするのかを具体的に記入。報告内容、確認事項、校内放送の内容、現場に持って行くものなどを明記。)
⇒ミスや指示待ちの防止。
- ・「現場リーダー」の役割を増やす。
⇒現場における調整役が必要と判断。

【最新版アクションカード】(R7) 一部抜粋



カード詳細 (一部抜粋)



緊急時に素早く手に取れるよう、職員室前方黒板に設置している。

4 成果と課題

令和5年度から年2回の緊急時対応訓練とそれに伴う振り返り及びアクションカードのブラッシュアップを継続してきた。今年の夏で計6回を実施したが、回数を重ねても「もう充分！緊急対応には自信があります！」と断言する教員は現れていない。むしろ、どの職員も訓練を通じて危機意識を高め、次回の研修への意欲を見せている。各個人のスキルと自信を高めることが目的のひとつではあったが、もしかしたら自信を持つというのは傲りなのかもしれないと途中で気付かされた。今年度の振り返りの際、「緊急時対応訓練が実際の対応に役立つと思うか」と問うたところ、ほぼ全員が「そう思う」と答えており研修の意義を実感している。

緊急時の組織的対応については、成果があったと考える。アクションカードがあることで、自分の役割が明確になり責任をもって現場に関わると共に、職員間で同じ行動が重複するなどの無駄を省くこともできた。訓練を通して、現場で直接支援する役割のほか、本部（職員室）で指示を出したり保護者連絡を行ったりする役割、さらには他の児童の安全確保や心理的安定を図る役割など、さまざまな役割があることを全職員が理解することができた。「大変なことが起きたから全員その場に駆け付ける！」のではなく、自分の担うべき役割を自覚し、自身がその役割に集中しているという“信頼と安心感”を全体で共有することができた。これこそが、組織的対応の最大の成果であると思う。

課題としては、今後もアクションカードの継続的なブラッシュアップが必要なことである。訓練のたびに必ず反省点が出ており、机上では見落としがちな現場の意見を得る貴重な機会となっている。こうした声を反映させ、実効性をさらに高めていきたい。

また、職員の異動により毎年「アクションカードを初めて知った」という職員が出てくることも課題である。年度当初は学校・学級経営の準備で多忙を極めるが、子どもたちの学校生活が始まる前に一度は緊急時対応訓練を実施し、新しい職員も含めて本校のアクションカードへの理解を深め、組織的な連携体制を整えておきたいところである。

アクションカード自体の認知度がまだ低いと、養護教諭同士の情報交換や本研究の報告の場を通じて、本校の研修や実践について積極的に発信していきたい。

5 おわりに

本研究を始めてから、実際にアクションカードを使用した緊急事態は起こっていない。養護教諭不在時に救急車を呼ぶ事例はあったが、その際にアクションカードは使用しなかった。使わなかった理由を尋ねたところ、「訓練を覚えていたから、やらねばならないことはカードがなくてもできた」とのことであった。カードが無くても落ち着いて的確に対応できたのである。これを訓練の成果と言わずなんというのだろうか。大変ありがたく心強い感想であった。

私個人としては、出張等で学校を不在にする際に「学校で事故が起きないか？」「学校に残っている人だけで対応できるか？」と心配することがなくなった。安心して信頼を持って学校を離れられるようになり、精神的負担が軽減されたと感じている。健康面で配慮が必要な児童を担当している担任の先生方や管理職の先生方も、同様の安心感を持っていてくれれば大変うれしく思う。

最後に、働き方改革により研修時間の精選が進む中、令和5年度から今年度にかけて毎年2回の訓練時間を確保できていることは、管理職や教務主任の先生方の深い理解と協力によるものであり心より感謝申上げたい。

「怪我・病気の対応？救急救命？そんなの養護教諭の仕事でしょ！」と言われがちな立場である。私たち養護教諭は、専門職としての自覚を持ち日々研鑽を積みながら、一人職として大きな責任と誇りを持って勤務している。20年以上携わってきた私は、自分の判断ミスや失敗経験を積み重ねて、自信より危機感が高まるばかりである。「養護教諭として必要なこと・できることは何か」と問われると、子どもへの対応力を中心とした「資質の向上」を挙げがちであるが、今回取り組んだような「学校全体の体制づくり」もまた安全意識の高い養護教諭だからこそできる重要な役割ではないだろうか。今後も、教職員と協働体制を築き、養護教諭の視点を活かした「子どもたちの安心・安全を守る学校づくり」に貢献していきたいと思う。

6 引用・参考文献

※1「学校等の管理下の災害〔令和6年版〕日本スポーツ振興センター、令和7(2025)年1月発行